

## 「私と日本」

## 元日本留学生の半生 母国の経済技術発展への貢献と絆

プラユーン シオワッターナー

5月10日（金）アジア文化会館において、泰日経済技術振興協会（TPA）の会長であるプラユーンシオワッターナー氏による講演会「私と日本」が開催された。TPAは、日本からのODA受入れパートナーとして1973年に元日本留学生、研修生によって設立された団体で、1990年代には完全に独立自走化し、2007年には泰日工業大学（TNI）を設立した。

プラユーン氏は1967年に来日され1974年まで電気通信大学、大阪大学大学院に留学、AOTSの技術研修を終え、母国であるタイに帰国された。帰国後はTPAの事務局長、会長などで関わる他、チュラロンコーン大学準教授、タイの国立計量研究所所長、国立科学技術開発機構副所長など、エンジニアとして、さらに各機関の経営トップとして活躍されている。

今回の講演録の補足として、日本留学に関係する部分にフォーカスしてインタビューもお願いした。講演録と合わせ読んでいただければ、一人の元日本留学生の活動がその留学で形作られた知識、経験、さらに人的広がりを通して、いかに社会や産業の発展に対し、また双方の国や地域的な広がりをもって、広範な影響を与え、貢献しうるかということが理解されると思う。

▶ 学歴等	
1967-72	電気通信大学（電気工学）卒業
1972-74	大阪大学大学院工学研究科修士課程（電気工学）修了
1982-84	ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア）修士課程（科学技術政策）修了
▶ 職歴等	
	泰日経済技術振興協会（TPA）関係
1975-76	カセサート大学工学部講師
1976-80	チュラロンコーン大学工学部講師
	1980-81 研修部長
1981-82	東芝株式会社テレビ部副部長
1985-90	チュラロンコーン大学工学部準教授
	1990-93 事務局長
1993-94	タイテレフォン&テレコミュニケーション株式会社（TT&T）副社長
1994-98	ク룬タイタナキット株式会社副社長
	1995-98 専務理事
1998-02	タイ国立計量研究所（NIMT）所長
	1998-01 理事
2002-05	バンク・タイ・パブリック株式会社副頭取
	2001-05 副会長
2005-10	タイ国立科学技術開発機構（NSTDA）副所長
	2005-09 会長
2011	タイ国立計量研究所（NIMT）顧問
	2011-13 会長
2012	AUN/SEED net Secretary General
2013-17	タイ国立計量研究所（NIMT）所長（第二期）
	2020-21 事務総長
	2022- 現在 会長

本日はありがとうございます。3団体<sup>1</sup>共催での講演会を開催していただき感謝申し上げます。今日の話は、私の人生の「旅」についてです。この話が皆さんに多少でも参考になれば、私は本当に幸いに思います。

最初にアップルの創業者のスティーブ・ジョブズの言葉をご紹介します。

「将来を見据えて点と点を繋ぐことなどできません。過去を振り返ったときに初めて点と点が繋がるわけです。ですから、私たちは将来どこかでその点が繋がると信じなければなりません。直感、運命、人生、カルマ、なんであれ、何かを信じる必要があります。」これが私の今までの「旅」のひとつの結論です。人との出会いは、一つの「点」です。この結論を皆さんが頭の片隅に入れておいて話を聞いてもらえればと思います。

## ■ 日本への旅

私は、1948年生まれで今76歳ですが、生まれた場所はバンコクから南へ約700kmの距離にあるトムソンというところ。列車で12-13時間位かかります。故郷にいたときは徒歩か自転車のみでの移動なので、行動範囲は10キロ程度でした。1965年にバンコクの学校に入り、新しい世界に入りました。バンコクで初めてテレビを見ました。行動範囲も少し広くなりましたが、とはいえバンコクとか、タイ国内だけです。

高校卒業の後、チュラーロンコーン大学理学部に入学し、1967年に日本の文部省の奨学生試験に受かりました。その時は大変うれしかった。当時は日本製品…ソニー、ナショナル製品などがタイでも売っていましたから、日本への出発は、見たことのない新しい世界に向うという感覚がありました。



## ■ 毛沢東

当時タイから日本へは直行便がなく、一度香港に降りないと日本へは行けませんでした。香港に1泊して翌日また飛行機に乗るのですが、その前にデパートにセータを買いに行きました。そのデパートの壁に大きな毛沢東の写真が飾られていました。その写真を見て、とてもびっくりしたんです。私にとって、今までの常識がひっくり返されるような感じでした。軍事独裁国家のタイでは、毛沢東語録を持っているだけでも裁判にかけられ、数年間拘留される。その人の写真が香港では堂々と街中に飾ってある。そのこと自体考えられないことでしたが、同時に疑



1. 一般社団法人日タイ経済協力協会、一般財団法人海外人材育成協会、公益財団法人アジア学生文化協会の3団体。姉妹団体として泰日経済技術振興協会の設立、運営に協力した。

間を持ちました。タイで言われているように、本当に毛沢東は悪い人なのか？ それともいい人なのか？ なぜこの場所に頭上高く飾られているのか？

### ■ ベトナム反戦



また ベトナム戦争についてもそうです。日本に着いたとき、寮にベトナムの留学生が10人いました。タイにいた頃は情報を得る手段はラジオだけで、ほとんどが国営放送でした。タイには米軍基地があり、米軍は南ベトナムから北ベトナムの侵略を防ぐんだ、というようなことを聞かされていました。ほとんど毎日そういう風には私は聞かされました。寮の住人たちは南ベトナムの人たちで、とても共感を持ってました。ある日彼らに「サイゴンはベトナムで一番大きな都市ですか？」と聞いたら、一番大きいのはサイゴンではなくハノイだといいました。その時に初めてベトナムの人は南とか北といった意識を持っていないのだと思いました。それまで南ベトナムと北ベトナムの2つの国があると思っていたのですが、その私の常識は違ってきました。

### ■ 大学紛争

当時、日本で行われた大学紛争も同様です。当時は紛争があると講義が休校になるので、あってもいいかなという程度でした。なぜこんなことになっているんだろうと、素直に興味を持ったという感じでしょうか。実際に見に行ったりもしましたし、東大にいたタイの先輩に説明をしてもらっ

たりもして、なるほど、そんな考え方もあるんだなと理解するようになりました。

当時は大学紛争だけではなく、ベトナム戦争や公害問題など、いろいろな社会問題が発生していて、それに対する様々な社会運動が展開されている時でした。そういう活動をしている当事者の方々には失礼かもしれませんが、私にとっては視野を広げるよい勉強になったというのが正直な気持ちです。

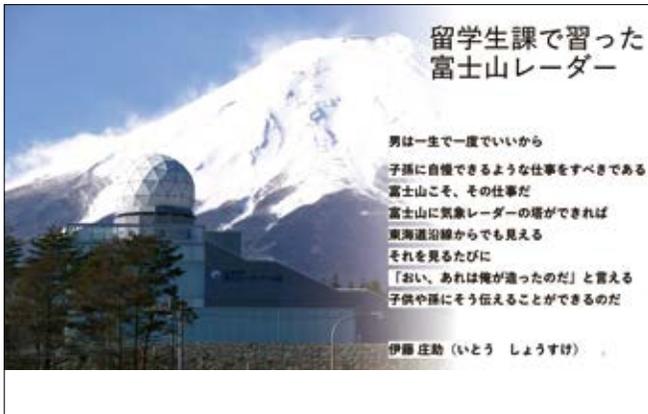
### ■ タイ留学生の野球チーム



大学1、2年生の時にタイの仲間と野球チームを作っていました。当時日本でタイの学生チームは4つあり、夏休みに野球の試合をしていました。私はピッチャーでした。最後の大会で優勝して、私は最優秀投手になりました。日本に来なければ、野球を知る機会もなかったですし、自分が投手としてチームに参加することなど考えられなかったです。ちなみに私は巨人ファンでしたが、阪神の江夏、広島の安仁屋、外木場、南海の野村もファンでした。

### ■ 富士山レーダーの話

千葉大学の留学生科にいた時、印象に残っている事のひとつに先生が教えてくれた話があります。1959年、台風による被害で死者が数千人になりました。台風を観測するには高いところにレーダーを設置しなければならず、富士山に設置するという計画がありました。しかし富士山の頂



上付近は気候も厳しく設置するのはとても困難でした。その時の設置作業のリーダーの方が「男は一生に一度でいいから子孫に自慢できるような仕事をすべきである」と仲間を激励し、観測レーダーの設置を成し遂げ、その後の被害を少なくすることが出来るようになったという話です。私は今でもこの話がとても深く印象に残っています。

## 日本社会との出会い

今日まで、大いに私に役立ってきたのは、もちろん日本留学生時代の大学での「点」(知識や先生、友人)ですが、やはりその後の日本社会との出会いからも大きな影響を受けています。かなりバラエティのあるそれぞれの「点」が私にとって大切な物になっています。

ベトナムの平和と統一を訴えるベトナム人留学生の強制送還と ABK 工藤さんとの出会い・・・

## ABK の工藤正司さんのこと

工藤正司さん(アジア学生文化協会)は、最初に、



大学以外の日本社会に触れる機会をくれた人でした。

1971年東大駒場寮では毎年11月頃、留学生がオープンハウスを実施して近隣の人々に交流のため寮に来ていただき、各国のお菓子や切手などの展示をして楽しんでもらっていました。

その時、私たちはビールを配りました。当時タイと日本の貿易不均衡が問題となっていた時期です。どちらかを批判する

るのが目的ではなくこういう事実があるということを知ってもらうことが目的でした。後日、工藤さんから電話がかかってきました。ただ単に「工藤」という名前を告げられただけだったら信用しませんでした。ABKの工藤と名乗られたので信用しました。駒場寮は食事をして寝るだけの場所でしたがABKは家族の様に何でも相談できる温かさがある場所だと理解していたからです。工藤さんの説明では、ベトナムの平和と統一を掲げる留学生が強制送還されたとのことで、タイの学生にも同様な事が起こるかもしれないので、注意して欲しいとのことでした。また、「何かあったら協力します」と手を差し伸べてくれ、大変心強かったのです。

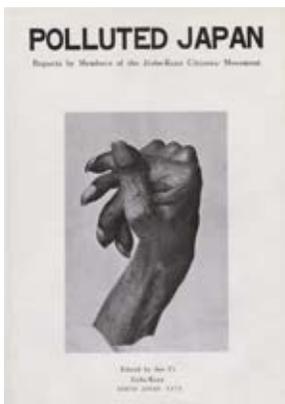
## ベ平統からベ平連

この当時、色々な方の紹介で様々な活動をしている人たちに会いました。「ベトナム平和と統一のために闘う在日ベトナム人の会」(ベ平統)の指導者グエン・アン・チュンさん(東工大)の紹介で、ベトナムに平和を!市民連合(ベ平連)の井上澄夫さんとも会いました。彼から話を聞いて、色々な考え方がある事を知りました。丸々全てを信じるのではなく、考え方も色々あるのだということを知りました。それまでのタイでの一面的な物の見方から多角的に物事を見ることが出来る様になりました。

## ■ 公害問題との接点

もう一つは公害問題との接点です。宇井純さんが外国人留学生や日本に住んでいる外国人を連れてバスで公害見学に連れて行ってくれました。そして当時の日本の公害がどのような状況かを教えてくださいました。印象に残っているのは足尾銅山です。そこにはほとんど木がなく、私たちにはとても刺激的な光景でした。その後公害関係の本をタイ語に翻訳してタイに送り出版しました。タイの工業化は良いことではあるものの公害という問題もあるということを理解して欲しかったためです。また私たちが帰国する前にシーラチャー（チョンブリー県）での原子力発電所の建設反対運動が起きました。既に政府は承認していましたが、タイの学生達と共に私たちも参加して反対運動を実施して、結果としては建設廃止となりました。

宇井純さんが作ったこの本をタイ語に訳して出版しました。タイの人たちや大学生が公害の事を知ってもらえるようにという思いがありました。



## ■ 万歩計

これは私の友人からもらった万歩計です。10年位前に食事をしている時に渡されてタイに帰ったら毎日1万歩歩きなさいと言われてきました。始めた当初はとてもつらかったのですが、今では毎日1万歩は歩けるようになりました。日本社会との



出会い、いろいろな方と知り合った事が点となり、その上に団体（ABK・AOTS・JTECS）の人たちと知り合ったことで、私の新しい人生の再出発となったという感じがしています。結局今まで勉強だけでしたら、このような「旅」にはなりません。工藤さんの紹介で新しい日本社会・団体・友人と知り合い、考え方は色々ありますが、やはりそれぞれから刺激を受け、今日現在の私になったという感じがしています。

## ■ 3つのエピソード

この3つのエピソードと穂積先生との出会いは今日に至るまでの私の出発点であると私は信じています。

最初のエピソードは1967年、日本に着いた時に千葉大学留学生別科の大月先生がオリエンテーションで日本語の大切さを説明されました。その時の話は、いくら難しくても「千里の道も一歩から」という話で「一歩踏み出せば可能性は出てくる」というような意味で私は受け取りました。非常に良い教えであったと思います。

2つ目のエピソードは1970年に四国の友人が私を吉野山に案内してくれた時のことで、彼は私に言いました。「大学を卒業してタイに戻ったら、ぜひ日本とタイの架け橋になってほしい」。私は“架け橋”がどういう事かは、はっきりとわからなかったのですが、約束としてうなずきました。

3つ目のエピソードは1973年に大阪大学（阪大）で勉強している時に、私を息子の様に大事にしてくれた会館のおじいさんが教えてくれたことです。当時、そのおじいさんから色々注意を受けたのですが、その中でも心に残っているのが「旅の恥は掻き捨て」と言う日本の諺があるんだ。旅に出る人が、もう二度と戻らないと思うから、旅先では恥ずかしい事でも平気でやる、と言う意味だ。君はタイに戻るからと言って、絶対その様な態度、行動はとらないように。」と教えてくださいました。

この3つのエピソードが後々も自分の人格形成



に影響を与えたと思います。

### ■ 穂積五一先生との出会い

穂積先生との出会いは、1974年のAOTS（海外技術者研修協会／現 海外産業人材育成協会）で研修の時でした。当時は公害問題に関心を持っていた時であり、日立的那珂工場で測定器の研修をし、その後東京都での測定実習も行いました。

穂積先生とお会いした時、先生は私に泰日経済技術振興協会の説明をしてくださいました。日本側には日タイ経済協力協会（JTECS）、タイ側には泰日経済技術振興協会（TPA）がある。原則として「日本はお金は出すが口は出さない」ということになっている。日本側の窓口は一本化して穂積先生が責任者となっているJTECSである、という説明でした。そして最後に「タイに戻ったら是非、このTPAをタイ社会に役立たせてほしい」と言われ、私の心にとても深く残りました。先ほども申し上げましたが、これらが私の帰国後の出発点となりました。

### ■ TPAと私



左の建物が私が長年関わってきた泰日経済技術振興協会（Technology Promotion Association(Thailand-Japan)=TPA）本館です。1975年当時、日本政府に土地を買っていただき建設しました。その後、協会が事業を発展させ独自でお金を貯めて、足りないところは日本の海外経済協力基金（OECF）からも融資を受け1998年にバンコクのパタナカーン区に新館を建設しました。写真右の建物です。



TPAを作ったのは、お二人の方、穂積先生とソムマーイさんです。ソムマーイさんは慶応義塾大学卒業後タイ銀行（Siam Commercial Bank）の総裁を務め、大蔵省の大臣にもなった方です。この2人がこの協会を創設しました。一番基本となったのは「お金は出すが口は出さない」という原則でした。今日まで半世紀以上続けられている事業として、この原則がとても大切なことだったと思っています。それと連絡窓口を一本化したことです。タイではTPAが、日本では日・タイ経済協力協会（JTECS）が双方の信頼関係の下で色々な事を相談しながら活動を行ってきました。

TPAの主要な事業はセミナー・研修・出版・校正事業などです。出版事業は当時、現場で働いている技術者向けの本が無く、あったとしても英語版だけでした。それらの本は高価で、そう簡単には読めるものではありませんでした。その様な状況でしたから、留学生の先輩たちが日本の技術書をタイ語に翻訳して出版しまし

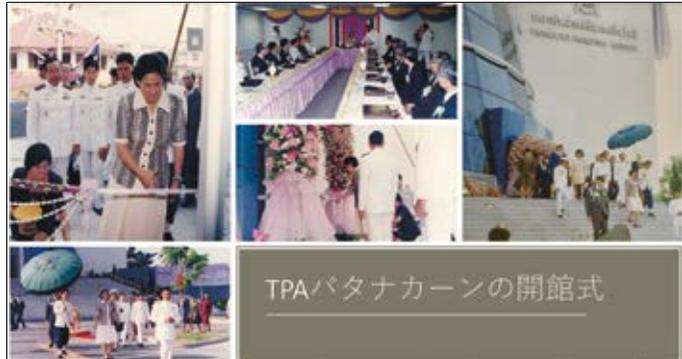
た。技術用語を自国語で普及させないと、国の技術は発展させることができない、という考えからです。それらの技術書は現在まで多くの現場で使われています。ある時、私が企業を訪問した際に、その企業の方が「30年前にこの本を買って、今でも使っている」と言われました。本当にうれしい事でした。

当時は様々な分野（エネルギー・コンピュータ・校正・語学・出版・広報誌等）の小委員会がありました。私もいくつもの委員会を経験しました。小委員会はそれぞれ仕事を持っている専門家の委員たちが、月に一度の割合で仕事を終えた夕方から集まり、夜中まで喧々譁々の議論をしながら、現場で必要とされる技術研修の企画や技術書出版の計画を立て、月にいくつかの研修コースを企画し、いくつものタイトルの本を出版しました。これらは、全てタイ側の自主、主体で行われ、日本側の関与は一切なかったのです。この背景に「お金は出すが口は出さない」「企画運営はタイ側に任ず」という原則があって、初めてできた事だと思います。

私は、小委員会のメンバーから始まり、その後は小委員会の議長になり、経験を積んだ後理事になり、最終的に会長になり4期9年勤めました。

### ■ パタナカーン新館

スクンビット本館が手狭になり、1998年バンコクの東部スワンルワン区パタナカーン路に新しい技術振興センター（TPI）を作りました。スクンビット本館は床面積4700㎡の建物でしたが、新センターは床面積7000㎡、7階建てガラス張りの建物です。シリントン王女にご臨席いただき開館式を行いました。



1998年 TPA 技術振興センター開館式。シリントン王女ご臨席

新たに工業計測機器校正センター、実験器具検査センター、産業技術情報センター、電気・機械保全実習室、空圧・油圧実習室、一般研修室、コンピュータ研修室、図書室、食堂、書店が配置され、規模を大きく拡大して事業を開始しました。4800㎡の土地は自前で購入しましたが、建設費用は日本の海外経済協力基金 OECF(The Overseas Economic Cooperation Fund) からの融資（借金）でした。この OECF との関係も私にとって重要な1つの「点」となりました。これが後ほど別の「点」に繋がっていきます。

しかし、開館のタイミングはアジア通貨危機と重なり、タイにとって最悪の時期でした。当時の工業大臣に開館式への列席を依頼しに行ったのですが、大臣から「この施設はコンドミニアムとして利用することになるね」と言われました。深刻な経済危機の状況下において、使いみちがないだろうというような事を笑いながら言われました。今では笑い話ですが、私たちは



パタナカーン新館同様、泰日工業大学開学式にシリントン王女ご臨席

この状況を乗り越え、大きく事業を発展させることができました。OECFの借金を完済し、そこからさらに資金を蓄えて、2007年には泰日工業大学を設立しました。開学式にはTPIの開館式の時と同じように、シリントン王女のご臨席を頂きました。現在は3学部4000人の学生を擁するまでになっています。

### ■ タイ国家計量標準機構の設立

1998年前後に科学技術省にいる知り合いから連絡があり、「タイに計量研究所を設立する予定ですが関心はありますか？」と聞かれました。私としては、測定器の校正の大切さはTPAで行っていた事もあり、十分に理解していました。タイ国内には一次標準設備がなく、シンガポールやオーストラリアに二次標準機を持って行って校正してもらわなければいけません。タイ国内にあれば他国にお願いすることもなく費用面でも低く抑えることが可能となります。最終的にこうした理由で、所長の選出の過程に応募して受けました。1998年6月1日に組織として始動されました。当時は経済危機の中であり、真っ暗な状況でのスタートになりましたが、この時も大槻先生の「千里の道も一歩から」という言葉が思い出されました。

### ■ 危機の中の出発

今までの日本との間で築き上げた信頼関係を活かして、日本の関係機関に資金面や技術協力に関する相談を行いました。

研究所の立ち上げ時に考えていたのは、当時の経済危機の中でのタイの予算状況では1年に1つ程度の標準となる機材しか購入できず、それでは計量研究所は成り立たないということでした。そこで私は

海外経済協力基金(OECF: Overseas Economic Cooperation Fund)後の国際協力銀行JBIC: Japan Bank for International Cooperation)からラボの建設と標準機材購入資金10億バーツ(当時のレートで約100億円)を借り入れました。また日本の産業技術総合研究所(AIST)を通じ、計量標準総合センター(NMIJ)をお願いして指導のための専門家を派遣してもらいました。

### ■ 危機の中の出発 融資借入

当時国の借金管理委員会からは、未曾有の経済危機の状況下で、なぜこんなにも多額の借金をしなければいけないのかと問われたので、私はこういう危機の時だからこそ、品質管理の一番基礎となる所に投資することで、タイ国は世界に対して国家の意志を伝える事になるのではないかと説明しました。結果的には、委員会もOKを出し建物も建てられ設備も整えられました。



計量研究所

私はこの研究所に2度勤めています。

1回目は1998年から2002年、2回目は2013年から2017年です。1回目から2回目まで11年位空いています。なぜ継続して勤務しなかったのか？裏話を簡単にお話します。

研究所設立時、機材は問題なかったのですが、建物の建設は入札で決定しました。決定した企業を日本側JBICにも連絡しました。日本側からは日本の企業がなぜ選ばれないのかと問われましたが、タイ企業の方がスペックを満たし低価格であったためである、と説明しました。

タイでは政府関係の建築物を建てる時は最終的に大臣の承認が必要となるのですが、中々大臣の承認が下りませんでした。半年間何度も大臣に許可を求めたのですが会ってもらえずにいました。あるとき大臣秘書から呼ばれて、この建物はなぜこんなに高いのかと言われ、何かあるのかと疑うようなことを言われました。私は計量にかかる建物の特殊性を色々説明しましたが、結果的には再入札をするように要求されました。

結局、政治に関連する企業を選ばなかったためだと思いました。秘書に会う前になんとかそんな雰囲気は感じてはいました。私は技術面も十分検討し、オープンに入札して会社を決定したので、秘書に「再入札は違法だと思う。仮に（再入札を）進めれば大きな問題が波及する恐れがある」と意見を述べました。上層部の意図に従わなかったため、結果的に私は1期4年で退職することになりました。

その後また点が繋がるのですが、あるとき一緒に研究所を務めていた同輩と連絡を取ったとき研究所に席があるので「応募してください」と言われ応募して、面接して受かりました。2回目の研究所所長勤務となりました。

## ■ 国際度量衡局

2回目の所長を勤めていた時にフランスにある国際度量衡局から招待されて、今日までの成長に関して国際会議の場で説明を行いました。また、タイでアジア太平洋計量計画（APMP: Asia Pacific Metrology Program）総会を開催し Developing Economy Committee (DEC 発展途上国の機関を援護する委員会) の議長を勤めました。



フランス国際度量衡局での公演



タイで開催した APMP 会議 Jul 01.



アジア太平洋計量計画総会で DEC の活動を説明する

## ■ 国家計量研究所に対する日本の協力

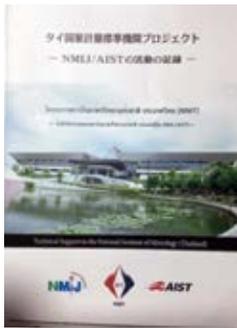
OECFの資金援助の他、JICAを通じての支援は以下のような大きな規模になりました。

- ・日本での受入研修 タイから36名のスタッフを計量標準総合センター（NMIJ）へ派遣し、3か月間、現場での実地研修を実施しました。この他にもAOTS経由で何人か派遣しています。
- ・日本からの専門家派遣 日本からNMIJの専門家を含めて95名をタイに派遣していただきました。

この支援が無ければ今日の計量研究所の成長はありませんでした。

計量研究所の活動の記録を記した本に、私は以下の様に記しました。

「私は、このNMIJ/NIMT技術協力は、最大規模のもので最も成功した技術協力の一つとして記憶されると確信しています。私たちがこの歴史の偉業に直接参加できて、またその成功の一頁に関わる機会を得たことを誇りに思うものです。」



『産業技術総合研究所（AIST）、計量標準総合センター（NMIJ）の活動の記録』



タイ国家計量研究所は無名の機関からアセアンのトップ機関になりました

## ■ 再びTPAでのリリーフ登板 コロナ禍の影響とそれ以上の経営危機

TPAの事務総長リリーフ登板のお話をします。2020年の9月末ごろ、夜中に当時の会長から電話があり、コロナ禍の景況でTPAの運営が危機となったため、事務総長を引き受けて欲しいと依頼がありました。これが私にとっても、TPAにとっても多分良い試練となったように思います。当時協会の活動は縮小されました。外因としては、コロナ禍の影響がありましたが、内因として協会の事業を長年続けてきた同じやり方や考え方に疑問を持たず、そのまま現状通りで安泰だと考えていたことがあります。外部の新しい技術を取り入れることもなく、急速に変わる社会の変化に対応できていないということが、コロナ化と同時に非常に大きな問題でした。

実施されていたセミナーの内容を精査したところ、7-8割が以前から実施していたものの繰り返しだということが判明しました。新しい技術・経営等のセミナーがほとんどない状態でした。特にアナログからデジタルへの世界的移行時期でもあり競争力が弱っていました。一方では、コロナ禍によりセミナーもオンラインで実施する必要に迫られ、協会にとって新しい変化への道を切り開かざるを得ないという状態になりました。コロナ禍の影響で3年連続の赤字となり、本年ようやく黒字化する事ができました。協会の理事の間でも、現状を見ればブルーオーシャンの分野はすでにない。競争が激しい時代となりこういう時こそ内部の革新的変化がないと、変化に対応できないということが言われました。早急に内部の人材育成が必要であり、物事の見方や考え方を変えていくための訓練が必要になると認識しました。

## ■ 2020年、101の法則

これはスタッフに一番初めに見せた法則です。（この「1.01の法則、0.99の法則」は日本の

**1.01の法則**  $1.01^{365} = 37.8$   
 こつこつ努力すれば、やがて大きな力になります

**0.99の法則**  $0.99^{365} = 0.03$   
 逆に少しずつサボれば、やがて力がなくなります

WEBサイトでたくさん見つけることができますが、最初の出典がわかりません。) 停滞の外因はコロナ禍、内因は変化に対応できないことにより少しずつ力がなくなっていくことです。この法則では、ほんの少しでもずっとサボっていれば100の力が1年でなくなることとなります。逆に0.01でもコツコツ努力して行くことでやがて大きな力になる。ほんの少しでも改善することにより力をつけていく事が大切だと教えてくれます。

今協会では業務改善活動として、3-4人のスタッフでグループを組ませて毎年発表会を実施しています。ここが協会の曲がり角だと思います。ここで道を間違えれば協会も回復することが出来なくなると考えています。コロナ禍は10年も続くことはなく、内因を改善していくことが大事です。これは今後も継続して行く様に協会幹部にも伝えています。

■ TPA50周年式典開催と現在のTPA

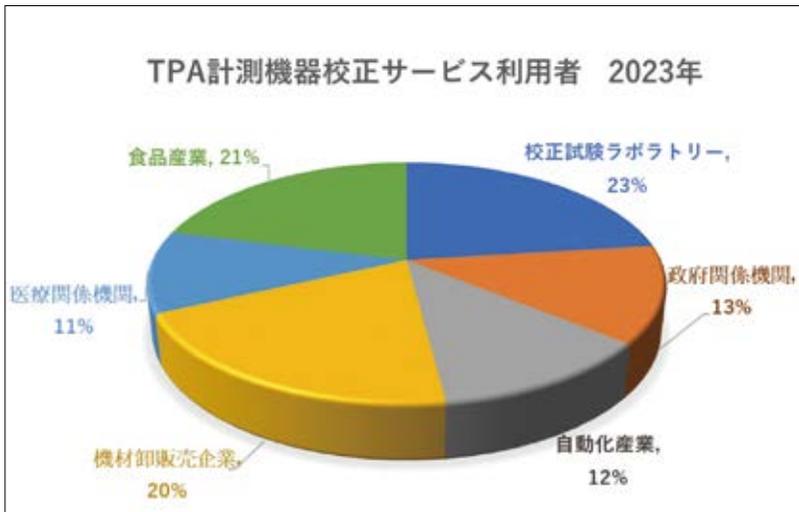
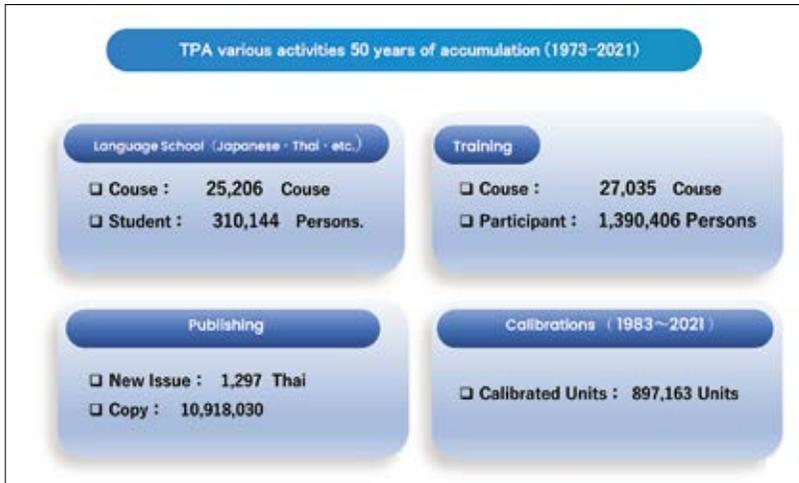
TPAは2023年に設立50周年を迎え、バンコク市内のホテルで50周年記念式典を挙行了しました。口では50周年と簡単に言えますが、様々な人の繋がりに支えられ事業を発展させ、半世紀という時間が経ちました。当初は200万パーツ位(当時のレートで約2000万円)の予算で、スタッフも4-5人程でした。今では3億1千万パーツ(現在レートで約12億4千万円)の予算となり、スタッフも270人となっています。また泰日工業大学(TNI)も出来ました。これは日本側の皆さんと共に誇りに思いたい。皆さんの支援によりTPA、TNIは今日に至っています。これまで実施してきた事業は以下(右頁図表)の通りです。

■ 終わりに 点と点の繋がって見える現在の景色



記念行事に参加してくれた  
 桑田 JTECS 理事長、  
 梨田駐タイ日本大使、  
 タイ商工会議所次長、  
 タイ産業連盟会長、  
 METI タイ工業省の代表者

「私と日本」



「将来を見据えて点と点を繋ぐことなどできません。過去を振り返ったときに初めて点と点が繋がるわけです。ですから、私たちは将来どこかでその点が繋がると信じなければなりません。直感、運命、人生、カーマ、なんであれ、何かを信じる必要があります。」

これが私の今までの旅のひとつの結論です。

### ■ 勲章受章

2023年春旭日中綬章叙勲（日本・タイ間の経済・技術関係の強化に寄与）



## プラユーン シオワッター氏 講演会終了後補足インタビュー

—— 来日されたのは1967年ということですが、最初の日本語教育はどこで受けたのでしょうか。

千葉大の留学生課です。留学生のための課程を作って1、2年生はそこで勉強するんです。ちなみに講演会で話した富士山の話はそこで聞いたんです。その2年間で日本語と教養課程も終えたあと試験を受けて、それぞれ進学する大学の2年生に入ります。私は1969年の4月、電気通信大学に進学し3年間学びました。

—— 当時は学生運動の影響で東大と東工大の入試が中止された年ですね。

残念な気持ちはありましたが、しょうがないという感じでした。

—— 日本の学生運動を見て、どう感じたのでしょうか？ 日本の大学が学生運動でピークだった時なので留学生への影響も大きかったのではと思います。

なぜこんなことになっているんだろうと、素直に興味を持ったという感じでしょうか。実際に見に行ったりもしましたし、東大にいたタイの先輩に説明をしてもらったりもして、なるほど、そんな考え方もあるんだなど。

当時は大学紛争だけではなく、ベトナム戦争や公害問題など、いろいろな社会問題が発生していて、それに対する様々な運動が展開されている時でしたから、そういうと失礼かもしれま



せんが、私にとっては勉強になったというのが正直な気持ちです。

—— 日本の大学で印象的だったことがあれば教えてください。

今考えてみると、当時の卒論、学部や修士の論文もかなり最先端のことをやっていたんだと感じます。電通大では有機半導体、阪大の時は発光ダイオードでしたから、現在でも通じるような最先端技術を学んでいたんですね。

—— 帰国される1974年、タイは大変な時で、反日運動に始まった学生革命とクーデターがありました。この運動についてどう感じていたのでしょうか。

原因がないことはないんですね。結局日本の投資が大掛かりにタイに入っていた。知らない外国に行くとも誰でも不安を感じて、自分の身を守ろうとする。突然大挙してやってきた外国人を警戒するのは理解できないことではありません。文化や考え方もわからない。例えばタイ人は他人に頭をたたかれることが許せませんが、

当時の日本人はそうした文化・慣習を理解していなかったかもしれない。ですから現場でもタイ人と日本人のコミュニケーションがうまくとれない。そこが一つの問題です。今、中国企業がタイに入って来ていますが、そのやり方はなんとなく昔の日本と似ている感じがします。

もうひとつはティラユットさん（当時の学生運動のリーダー）が反日運動を利用した、ということ言い過ぎかも知れませんが、学生運動だけでは軍の独裁政権に対抗できない。そこでバンコクの一般市民が感じている共通の感情である“反日”を利用して、人々を団結させるという、それが彼の考え方だったのではないかと思います。その結果、最後には軍事政権を倒せたわけです。ただそこまでやる必要があったかというのはいりません。

—— 帰国後は、チュラロンコーン大学で教鞭をとられました。

帰国後最初はカセサート大学に応募をして、工学部の講師になったんです。しかし程なくして、チュラロンコーン大学（チュラ大）で教員をしていた大阪大学の先輩から、チュラ大に来ないかと誘われ、移ることになりました。

—— 当時、日本の大学卒の留学生はタイでどう評価されていたのでしょうか。

日本帰りの私の先輩方はみなさんそれぞれの職場で成果を出していましたから、決して悪い評価ではなかったと思います。もちろん欧米帰りで優秀な方もいましたが、比較して欧米だから日本だから、といった評価はされていなかったと感ずります。

—— では TPA との関わりについて教えていただけますか。



タイ人留学生の野球チームでは投手として活躍

私は大学卒業後の1974年にAOTS（現：一般財団法人海外産業人材育成協会 当時：財団法人海外技術者研修協会）の研修生になったのですが、その時穂積先生と出会いました。そして、TPAについての説明を受けました。先生はタイに帰ったら、こういう機関でタイの社会に貢献するようにがんばってくださいと言われました。

—— 講演会ではものを正確に計ることの重要性の話をされていますが、“計量”が国家的に重要なことだという認識を持って、それを仕事にしようと思われたきっかけはありますか。

日本で勉強したこと、修士課程を終えて研修生の時に学んだことがきっかけとなり、帰国後にTPAにカリブレーションセンターを作ったのですが、そのときも先輩のスポンさんとケンカのように激論を重ねました。そうした議論がまた勉強になって、なるほど、こういうものがないと品質の保証はあり得ない、ということがどんどんわかるようになっていきました。ですか

ら大学で勉強したとか、誰かに教えてもらったということではありませんでした。

——その後、教育者、エンジニアという立場から経営者という方向にシフトしていったように思うのですが、マネジメントの勉強というのもされていたのでしょうか。

後半の仕事はマネジメントが中心ではありますが、それも技術の基盤がないとできないことです。

例えばタイ国立科学技術開発庁（NSTDA、副長官）時代も計量研究所（NIMT、所長）時代もそうですよね。マネジメントへの理解や人との付き合い方については、たぶん日本の友人たちと付き合い中でいろいろな考え方の人と出会い、意見の対立から議論する中できたえられ養成されていったのではないかと思います。

つまり技術面の知識とマネジメントの知識、その両方が必要なんです。その分野の内容を深く理解していなければ、部下を説得し先に進むことは出来ません。なぜ計量研究所が必要なのか。どうしてそんなに正確で細かいところまで計る必要があるのか。それはマネジメントからのアプローチでは説得できないんです。この精度をどう品質に繋げるか、それがどういう結果になるのか。それを説明できるだけの深い知識がないとたとえマネジメントに長けていても、できない仕事だと私は思います。

——アジア各国が発展し、日本が先頭を走っていた時代は終わりました。そうした時代、タイ人の学生が日本で学ぶ意味はまだあるのでしょうか。

日本で学びたいというタイ人学生は大勢いま



計量研究所で

す。日本の文部科学省奨学生の試験は、今もかなりの競争率で100倍またはそれ以上だと思います。たしかに私が留学した1967年は、ソニーやナショナル（現パナソニック）など有名企業は全て日本のものですから、技術を学ぶのなら日本へという空気がありました。今は中国企業も韓国企業もありますから、選択肢が増えたことは事実です。しかしどの国も一緒かということ、そんなことはないと思います。ある専門分野は日本の方が進んでいる、ある専門は韓国が、中国が、ということだと思います。

ですから日本は自分の強みを見直してそこを磨くべきです。タイに日本から調査団がよく来ますが、なんとなく皆さん消極的な考え方なんです。「もう日本はダメでしょうか？」と。しかし、そんなことはありません。日本のいいところはたくさんあります。そういうところを見直して、ブラッシュアップして、それを留学生に提供していく。自信をもってそういったことを考えて欲しいと思います。

——これからタイと日本、ASEANと日本の関係はどうなっていくのでしょうか。自動車産業でいうと、タイの中で部品まで作れるようになっていっている。そういう意味でこれからタイと日本の



職員のみなさんと

関係はどうなっていくと考えますか。

自動車はガソリンからEVや水素、燃料電池などへと変わりつつありますが、そういった関係の中で日本とタイはどのような付き合いをしていくのかということですね。もう一つは電子部品です。AIに使う、クラウドに使うといったようにチップの役割がさらに大きくなっています。PCB（プリント基板）関係とかチップ関係などで最近日本からの新たな投資がタイにあります。その時々技術の展開によって、こうした投資の状況は変わってくるのではないかと思います。ですから自動車についての需要は下がってくるのではないかと思います。

—— プラユーンさんのように国を支える人材が日本留学生の中から出ているのは嬉しいことです。

やはり歯を食いしばってやってきたから出来たことだと思います。計量研究所も私が入った時は経済危機の1年目で予算局へのお金の要求はほとんど通らなかった時です。人件費はなんとかなくても、設備の購入までは考えられない。そこでJBIC（国際協力銀行）に借金を申し込

んだのですが、TPIを作った時のコネクションがなかったら、それも考えられませんでした。旧知の関係者の方々がいろいろ尽力してくれました。当初の予算だけでも食べては行けましたが、そこにいるだけで、一歩も先に進んでいくことはできなかったと思います

一番つらかったのは、JBICからの貸付の可能性がわかったあとの政府機関への説明でした。大蔵省の委員会に借金をしたいと説明に行ったのですが、この時はかなり怒鳴られ

ました。今タイはこんな時なのになぜまた借金をするんだと。私は今、こういう時だからこそ、産業の基礎となる計量がいかに大切かということを訴えました。そして、なんとか許可を得たのですが金額は10億バーツ（当時のレートで31億5000万円）です。日本との関わりがなかったらありえなかった。建物と機材、そしてそれらに加えてJICAの技術支援がありました。日本から指導員を派遣してもらったり、タイの若い人を日本に派遣して研修をしてもらったりしました。それらがなかった今の計量研究所はありえません。

第二期では、化学だけの建物を作りました。最初は機械と電気関係の計量でしたが、最近は化学も重要になっていますから、毒や黴菌の計量も行っています。以前の実績がありましたから、その時はタイ政府から7億バーツ（当時レートで22億2600万円）ほどが出ました。その結果かなり東南アジアの中でも立派な機関になったと思います。

—— 貴重なお話をありがとうございました。これからもタイと日本の架け橋として、ご活躍いただけることを期待しております。